

令和2年度自己評価表

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切に知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の 重点目標	1 基礎・基本の定着と学力の向上 2 基本的生活習慣の確立 3 地域連携と特色ある教育活動 4 進路意識の向上と進路保障	5 コミュニケーション能力の向上 6 業務改善の取り組み
-------------------	---	--------------	---	---------------------------------

年 度 当 初					評 価 結 果 (中 間)		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
1 基礎・基本の定着と学力の向上	・ 全体的な基礎学力の向上と学習意欲の向上 (進路・教務)	・基礎力診断テストの評価(GTZ)において下位層の者が少なくなく、固定化している。また、上位層の成績は年度をとおして大きな変化がみられなかった。	・指標として、基礎力診断テスト(1、2)年生におけるD3の生徒が45%を切り、上位層の成績が向上し、全体の学力が伸びる。	・家庭学習時間調査を年間2回、基礎力診断テストを毎学期始めに実施し、One Week問題集を活用して基礎学力の定着を図る。 ・朝学習・基礎学力テストを検証し、また基礎学力テストの表彰制度を継続するなど、実施方法の改善に努める。			
	・ 授業改革の取組の推進 (教務)	・各教科・科目で公開授業が実施され、協同学習の授業実践・授業研究は進んでいる。協同学習の手法による授業改革が徐々に実践されつつある。	・全ての教科・科目で協同学習の授業実践が行われ、生徒の能動的な学びが行われている。	・全員で協同学習をテーマとした公開授業を行い授業改革に取り組む。 ・校内外の授業研究会、ワークショップに積極的に参加する。			
	・ 成績上位者へのサポート体制の充実 (進路)	・3年生には、農業系大学進学を希望する生徒が3名、看護系大学1名、福祉大学1名を含む進学希望者が30名となっている。 ・3年生に対しては個別指導を始めており、1、2年生についてはまだ担当者を決定していない状況である。	・3年生、進学希望者の進路希望を実現する。 ・1,2年生の進学希望者に対する継続的な学習支援体制が実現されている。	・進学希望者(成績上位者)に対する個別指導を実施し、3年生を中心とした進学希望者への指導体制を確立する。 ・2年生へのコーディネーターを配置し、進学希望者に対して早期に個別の指導体制を構築する。			
2 基本的生活習慣の確立	・ 挨拶指導の徹底と頭髪・服装規定を守る取組の推進 (生徒指導)	・分離礼がかなり浸透してきた。 ・8割強の生徒が頭髪・服装規定を守っている。2割の生徒は毎月の服装検査後に改善をしている。	・全員が常に分離礼による挨拶ができる。 ・常に服装規定を守り、安定感のある生活態度で過ごしている。服装改善の保護者への文書を10%にする。	・清掃、授業、農場当番、部活動等あらゆる場面で分離礼を徹底する。 ・毎月の服装検査の実施と事後指導の徹底。 ・担任、学年団、学科、生徒指導部の連携を密にし、段階的・組織的指導を行う。			
	・ 教育相談・特別支援教育担当を中心とした組織的取組の推進 (環境保健)	・自己肯定感や自己理解・他者理解の意識が高くない生徒に友人とのトラブルが発生することがある。 ・QUの結果において、非承認群・不満足群・要支援群に分類される学校生活に対する意欲の高くない生徒が見られる。	・自己理解・他者理解が進み、より良い人間関係作りができるようになり、生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の割合が7月に比べ12月が上昇している。 ・QUの結果において、生徒の学校生活意欲平均得点が第1回目検査より第2回目検査が向上している。	・新入生全員面談と2、3年生の面談、職員による生徒観察をとおして、生徒の実態把握をし、より実態に即した学習支援・生活支援をする。 ・校内職員研修会を実施し、QU等を活用した教師の生徒対応のスキルをアップさせる。			
	・ 明るく活発な中での規律ある寮教育の推進 (寮)	明るく規律ある生活を送っているものの、自習で活用しているICT学習に、意欲的に取り組めていない。学習成果がいまひとつ実感できないことや、スマートフォンの画面が小さく扱いづらいのも原因となっている。	目的意識を持ち、意欲的な態度で自習に取り組める。	ICT学習を継続しながら、一週間に一回から二回学習プリントにも取り組む。また基礎学力テストの範囲についても出題し、成果が点数となって表れるよう工夫する。			
3 地域連携と特色ある教育活動	・ 各科の特色づくりと魅力の発信 (農場)	・生物科は乗馬教室が長年にわたって継続され、昨年より青バパイアの栽培が特色ある取組として加わった。食品科は複数の米の食味鑑定全国大会での入賞、いのこつラーメンの開発・商品化などが特色ある取組として地域の認知度も高い。環境科はJR倉吉駅の草花装飾や草花交流などが特色ある取組として継続している。これらの成果がテレビ、新聞などマスコミに多数取り上げられ、生徒の達成感や自己肯定感につながっている。	・地域に定着した取組を継続しながらも時代のニーズにマッチングした特色ある取組。例えばSDGsを意識した活動を実践する。 ・調査・分析を中心として、より科学性を高めた地域農業への貢献を視野に入れたプロジェクトに取り組む。 ・昨年同様特色ある取組をマスコミへ情報提供、地域へ発信することによって、生徒の自己肯定感や達成感がより一層高まる。 ・新しく導入されたスマート農業が本校の特色ある取組として地域、中学生、保護者から認知されている。	・各科の特性に基づいた課題研究を推進し、特色ある取組を地域の農業振興につなげる。 ・地域貢献に加えて環境問題などグローバルな視点を持った活動を実践する。 ・SDGsについての教職員の意識および知識を向上させる。 ・導入初年度のスマート農業をシラバスに沿って授業の中で計画的に実践する。 ・各科の特性に基づいた課題研究を推進し特色ある取組を地域振興につなげる。			
	・ 農業の6次産業化の取組の推進 (農場)	・ウインナーソーセージについて県版HACCPが取得済みであり、その継続について生徒、教職員が携わることによって衛生意識が高まっている。 ・イノシシカレー、奈良漬け、福神漬けの原材料を生物科で生産し、食品科での加工実習や製造会社への納品を行っている。 ・県版HACCPの維持管理に膨大な労力が必要であり、新たな製品への県版HACCP認証はできなかったがイノシン活用観点から「いのこつラーメン」の開発・商品化がされている。	・新たな製品のHACCP取得が実現している。 ・学科間の職員の意思疎通や生徒同士の連携によって、校内6次産業化が進み新商品の開発が進んでいる。 ・昨年同様、イノシシカレーの原材料の一部(人参、玉葱、ジャガイモ)、奈良漬け、福神漬けの原材料を本校で生産し、加えて新たな加工食品の原材料として青バパイアを導入する。	・新たな製品のHACCP取得については、個々の製品について取得する県版HACCPに加え、施設自体で複数の製品について認証される食品安全マネジメント規格(JFS-B)の取得も視野に入れ、その方策を検討する。 ・学科間の職員の意思疎通や生徒同士の連携に努め、校内6次産業化を目指した取り組みを進める。			
	・ 学校からの情報発信の推進とPTA活動の活性化 (教育支援)	・学校及び生徒の状況や学校の活動の様子を家庭、地域に情報発信しているが、十分に伝わっていないと思われる。 ・PTA活動への参加者はを一定数あると考えている(例：R元年度のPTA総会は78/249人の出席)。今後参加者を固定化させず、参加を促したい。	・HPの更新を積極的に行い、各月の行事計画の掲載、行事の様子など、本校の活動を広く校外にPRしている。 ・PTA会員に対してメール配信サービス、配布物などをとおして積極的に行事への参加を促す。	・教育支援部が毎週1件以上(年間35回以上)の記事をWEBページに掲載する。 ・教育支援として「まちcomiメール」を十分に活用する。			

年 度 当 初					評 価 結 果 （ 中 間 ）		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
4 進路意識の 向上と進路 保障	・早期からの進路意識 の啓発と進路指導の 充実 (進路)	・昨年度、就職決定率100%を実現した。一方、進路選択の見極めの不十分な生徒が就職に苦戦した。 ・現2,3年生にも進路希望先が未定の生徒が一定程度存在する。	・計画的な準備により進路目標を達成し、進路決定率を100%にする。 ・進路ガイダンス等をととして、生徒の進路意識の高揚を図り、年度末には2年生の進路希望が確定できるような進路指導を行う。	・早期に適切な進路決定がなされるよう、引き続きガイダンス、個人面談、個別面接指導等に力を入れると同時に、進路行事やLHRなど見直しを行う。 ・早期の定着指導、職場開拓を実施し、進路先の開拓を進める。 ・地元の大学見学等を実施し、進路意識の高揚につなげる。			
	・資格取得者増加に向けた取組の推進 (農場)	・FFJ級位検定を夏休み明けと従来の12月と合わせて2回実施し、上級位合格者は18名(前年は15名)に微増している。 ・各種資格検定の合格者数がのべ324名であった。農業技術検定2級3名(うち2年生2名)、測量士補合格2名(うち2年生1名)、家畜人工授精師3名など難易度の高い検定の合格者数が昨年以上であり、おおむね目標を達成できている。	・FFJ検定初級の合格率85%以上、中級の合格率は50%以上、上級位検定合格者数は25名以上になる。 ・各種資格検定の合格者数がのべ300名以上であり、農業技術検定2級、測量士補、家畜人工授精師などの合格者数が昨年以上である。	・FFJ検定の意義をことあるごとに説明し、生徒のモチベーションを高める努力を続ける。 ・農業問題集や実物鑑定の解答に可能な限り解説を加え、「わかった感」を持たせるようにする。 ・実物鑑定資料を引き続き増やし、iPad内にデジタルデータとして入力し、学習する時間や場所の自由度を高め、学習しやすい環境を作る。			
	・農業や地域を支える人材の育成 (農場)	・スーパー農林水産業士に3期生4名(うち1名が本校初の林業分野)が認定され、鳥取大学農学部へ3年連続して進学した。また、水稻栽培農家育成の観点から食料品の候補生も含め、3年生に5名、2年生に4名の候補生がいる。 ・就農促進研修会には1年生7名、2年生9名、3年生5名が参加した。先進農業経営者との話し合いにも積極的に参加する姿が多くみられた。 ・スマート農業を実践するための施設・設備が導入されている。	・スーパー農業水産業士4期生が昨年以上誕生し、鳥取大学農学部へ4年連続進学する。また、公立鳥取環境大学への進学もある。 ・スーパー農林水産業士やスマート農業など本校の魅力に関する情報を県内外の中学校へ発信し、入学希望者数の充足率が上がる。 ・スマート農業が農業教育の一手段として認知され、本校のカリキュラムの中に取り入れられることによって生徒の興味・関心を引きつけている。	・スーパー農林水産業士育成プログラムに則ったカリキュラムを確実に実施し、就農意欲喚起に関わる行事に積極的に参加させる。 ・4年生大学への進学希望者の基礎学力を高める取組を継続し、特にプロジェクト研究に重点をおいて主体的に取り組ませる。 ・導入初年度のスマート農業をシラバスに沿って授業の中で計画的に実践し、PDCAサイクルに沿ってその課題点について考察、改善する仕組みを構築する。			
5 コミュニケーション能力の 向上	・生徒会活動と部活動の活性化 (生徒会)	生徒会活動に主体的に関わろうとする生徒が増えている。一方で生徒会活動に無関心な生徒も見受けられる。	生徒会執行部の具体的な活動を通して、全生徒に生徒会活動の意義を認識させる。	生徒会執行部が中心となって、生徒の意見を反映した新たな活動に取り組み、その経過・結果を全校生徒に分かりやすく示す。			
	・人権に関する知的理解と人権感覚の育成 (人権)	・自尊感情の涵養が十分でないため、他者との関係を築くのが苦手である生徒もみられる。 ・様々な活動をととして自己表現ならびにコミュニケーション能力を向上させる取組を行っているが、十分とはいえない。	・自らが社会的な存在であり、そのことに今まで無意識であった自らの現実と、それに伴う言動を振り返ることができるようになる。 ・コミュニケーションが相手の主張する権利を知る方法であると同時に、自分の権利を相手に伝える方法であることを知り、必要なコミュニケーション能力を身に付けている。	・クラスの特別活動をととして、お互いの意思疎通を図り、集団の目標と各個人の思いをコミュニケーションを行いながら整合性を図ることができるように授業環境を設定する。 ・授業の中で、少人数のグループで作業することにより、言葉や行動に関して自分の「普通」が相手の「普通」ではないことを知り、作業を遂行するためにはどのようなコミュニケーションが必要になるのかを考えることができる実習を設定する。			
	・幼保小中学校との連携や地域とのつながりの推進 (農場)	・様々な関係機関との連携事業は双方で満足度の高い取組となっている。 ・学校開放講座やうこう市場の開催など、地域住民を迎え入れることによって学校理解と地域貢献につながっているが、ややマンネリ化している。	・本校で身につけた(インプット)高度な技術・知識を異世代と交流し、指導する(アウトプット)ことによって自己肯定感や自信につながっている。 ・交流事業の企画、運営などを生徒が主体となって取り組むことができ、コミュニケーション能力がさらに高まっている。 ・幼保小中学校との交流が農業の楽しさややりがいを実感させ、将来の生徒募集につながるようになる。	・交流学习においてもPDCAサイクルを意識した取組(目的をはっきりわからせ、数値データ、記録、分析する習慣)を実施する。 ・学校開放講座に関しては、参加者からの満足度を把握し、よりニーズに合った内容の開放講座を目指すとともに、指導する側に立つ生徒の意識や技術を高め、学びの目的を再認識する。			
6 業務改善の 取り組み	○単純業務のマニュアル化 ○業務の平準化 (教頭)	・休みやすい雰囲気醸成やフォルダの整理等、教職員の意識が進み、効率化の素地はできつつあるが、時間外業務の量は減っていない。(逆に増えた。)(月平均R元16.8時間、H30 15.3時間) ・教員による偏りが大きい。毎月のように60時間を超えている人もいる。	・協働の意識の統一化 ・徹底したGS(グループウェア)の活用	・自己が所属している分掌及び学年に対する意識の高揚を図るため掲示板やGS等を活用し、個々の構成員が抱えている業務の進捗状況のチェックができるようにする。 ・引き続きスクラップ及び削減リストを作成し、業務の効率化を図る。			